2022年11月12日㊏ 読売新聞にて
副院長 / アイセンター センター長
岡野内 俊雄 医師の記事が掲載されました

からだの質問箱

硝子体と網膜 外れる過程で発生

岡野内　俊雄　倉敷成人病センター アイセンター長（岡山県倉敷市）

Q 硝子体黄斑牽引症候群とは

眼科でドライアイと白内障、降圧剤の目薬を処方されています。遠くがぼやけ、小さい文字が見づらい状態です。診断名は左目の「硝子体黄斑牽引症候群」。手術は難しいと言われました。この病気について詳しく教えてください。（82歳女性）

A

ご指摘の症状は、ドライアイや白内障などでも生じます。大切なポイントは、それぞれの疾患の程度を見極め、何が現在の症状に影響しているかを判断することです。

目の中には、硝子体というゼリー状組織があり、目に入ってくる光を透過させる役割などを担っています。硝子体は、昔のカメラでいうフィルムにあたる網膜と接着しています。硝子体黄斑牽引症候群の多くは、この接着が中年期以降に外れてくる過程で起こります。網膜で視細胞が多く集まる黄斑での接着は特に強固で外れにくく、加齢によって収縮した硝子体が黄斑を引っ張ること（牽引）で、黄斑の位置がずれたり、黄斑部分の網膜の肥厚や分離、剝離などが生じたりすると、症状が出ます。

具体的には線や格子状のものが歪んで見える歪視のほか、左右の目で映像の大きさが異なる大視症や小視症、視力低下など。症状は検査で把握でき、黄斑の変化がごく軽度であれば無症状です。

自然経過で牽引が解除されることもありますが、程度が強い場合や悪化傾向にある場合は、手術（硝子体手術）で牽引をなくします。術後は網膜がゆっくりと元の状態に近づくことで、症状や視力の改善が期待できます。留意すべきは、経過の長い病態や高齢の方は改善が乏しいこと。手術するかどうか迷う場合は、専門医に相談してください。

＊「からだの質問箱」は、毎月1～3週土曜日掲載です。

ご質問は住所、氏名（紙上は匿名）、年齢、電話番号を明記し、〒100・8055　読売新聞東京本社医療部へ。ファクスは03・3217・1960、電子メールはiryou@yomiuri.com

回答は紙上に限ります。質問のすべてにはお答えできません。